雲になる／夏の終り

小泉　貴

近代文藝社

雲になる／夏の終り

小泉　貴

近代文藝社

雲になる／夏の終り（くもになる／なつのおわり）

1994年10月20日　第1刷

著　者　小泉　貴（こいずみ・たかし）
発行者　福澤　英敏
発　行　㈱近代文藝社
〒112 東京都文京区目白台2-13-2
(03)3942-0869　Fax(03)3943-1232
定　価　1,300円（本体 1,262円）
印　刷　日本図書刊行会印刷部
©1994 Printed in Japan
ISBN 4-7733-2940-8　C0093　P1300E
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

雲になる……5
夏の終り……101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

雲になる／夏の終り

雲になる

1　プレリュードのように

ぼくはどこから来たのだろう。

遠い過去からか、人間ならぬ異物からか、それとも雲？　雲から来たような気がしなくもない。

このごろぼくは時折、自分についてそんなふうに考えることがある。そしてそう考えたことをまたすぐに忘れる。

また夢精をしてしまった。

相手の女の人は知っている誰の顔とも似ていなかった。でぶでぶと肥えた老婆は嬌声をあげながらぼくを抱きすくめ、ぼくの目を舐め、鼻をしゃぶり、口をすすった。ぼくは彼女からのがれようともがき、老婆は垂れ下がってしなびた乳房をぼくの顔いっぱいに押しつけ、そしてぼくの上にのしかかるように重なって、あわあわと笑うのだ。ぼくのあれは老婆の重みに押し

ひしがれ、ぼくは「いやだ、いやだ」と首を振って叫びつづけるのだが、いつの間にかぼくは、ぼくの意志に反して、上に重なっている重たくて柔らかな物体を自分から迎える形を作っていたのだと思う。

いつでもスパークしてしまった次の瞬間に「待った」をかけ、踏みとどまろうと頑張るのだが、あとの祭りだ。踏みとどまれたためしがない。そして、「ああ」という絶望のうめきを発するのは、あわれ、つわものどもの夢のあとだ。性懲りもない寝ざめの後ろめたさと屈伏感が、ぼくの下半身だけでなく、心をも湿らせてくる。

そんな時だ、なぜか、あの懐しい雲のことをぼくが思うのは。

墨をとかしたような黒々とした雲は、むくむくと湧き立ちながら、ぼくの頭上を、人家の屋根すれすれの高さで通過してゆく。夢の中で、その雲が湧き立つときをぼくは予感することができる。ひんやりした空気がぼくの身体を包み、黒い一点の胞子が空に浮かんだかと思うと、見る間に膨張し、あれよと思う間もなく湧きあがり、増殖しながら、音もなく、風をはらんで波状にぼくの頭上を襲ってくるいつもの夢だ。その猛烈な迫力にぼくは立ちすくみ、息をつめ、逃げられない。そしてぼくは夢の中で、その黒雲のむくむくとぼくを目ざして湧き立つのを待ち、愛してさえいるとわかる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

濡れたブリーフが気になって、まだ誰も起き出さないうちにぼくはベッドから抜け出す。夢心地はもう残ってはいない。ぼくを圧倒した老婆も、むくむくと襲来した黒雲も、今はきれいさっぱりぼくの脳裏から払拭されている。それよりいついかなる時に来襲するかもわからない現実世界の美貴子従姉さんに用心だ。

美貴子はぼくが小学生で彼女が中学生だった昔のルールを依然として変更しようとはせず、今年もまだぼくを子供扱いするからだ。「汚れ物は毎日必ず出すこと」などと命令を下すために、寝ぼけまなこのぼくのベッドを急襲しかねない。この家はもちろん彼女の家、厳密にいえば彼女の父親である伯父の別荘だから、権利は当然向こうにあるとはいえ、いくらなんでも、客人ともいうべき男の子の部屋にノックなしに闖入して、やれ男臭いだの、小人閑居して不善をなしてはいないかなどと礼節をわきまえない言動に及ぶのはかなわない。おまけに、勝手にぼくの洗濯物をつまみあげ、

――パンツはどこ。一緒に出しなさい。男の子がパンツだけ自分で洗濯するなんておかしいわよ。

なんて言うのだ。ぼくは死にたくなるような屈辱を味わわされて、ほかの汚れ物も奪い返すと、あっちへ行け！　とつい乱暴に従姉さんを突き飛ばしてしまうのだ。手に触る美貴子の身体が柔らかい。

美貴子従姉さんは大学生になってすっかり変容したようだ。ついこのあいだまではぼくにとって、できのいい自慢の姉貴でしかなかった美貴子だが、このごろ少しまぶしい存在になってしまったのがさびしい。高校生のころの美貴子が一番よかったと思う。広いひたいの下に利発そうな大きな眼が輝き、大きくも小さくもない口元から発する声も甘ったれ声でないのが好きだった。きょうだいのないぼくにとってこの上なく理想的な姉貴。ぼくは美貴子を誇りにさえ思っていた――とそのころを懐かしく思う分だけ、今の美貴子は大人というものに変貌したのだろうか。どこがどうとはいえないが、ちょっといやらしくなったとさえ思うのは、ぼくの心が以前に比べていやらしくなったせいだとは思うのだけれど。

昨日のことだ。

うしろ岩でスキューバ・ダイビングに興じて飽きない文彦従兄さんたちを迎えに行くのに、珍しく二人だけだった時の、なんとなくぼくを気づまりにさせた美貴子の不意の媚態？　は一体何だったのだろう。

海岸伝いにうしろ岩に行く途中に小さな流れが海に注いでいる所がある。川底は浅い砂地で、川幅も三段飛びぐらいで向こう岸に渡れる小川なのだが、その縁までやってきて美貴子がぼく

に言った軽口はやっぱり昔の美貴子ではない。

——私をおんぶして川を渡れるかなあ。それとも太郎君、外国映画式に私を腕に抱く？

ぼくはおんぶもだっこもしてやる気はないと言って断った。だってぼくはそんなフェミニストじゃないと言ってやったのだが、美貴子はそれじゃレディに手を貸しなさいと言って、それもぼくに断られると、太郎君の顔が赤くなったといって笑った。

ぼくはそんなふうにからかわれるのは、相手が美貴子でなくても好きじゃない。けれど、それより、実はそのほんの少し前にすれ違った四、五人の、大学生とも暴走族ともつかない、ピンクやシマシマのトランクスだけの、ぼくよりは少し年長らしい連中が、ぼくと美貴子が連れ立っていたのをにやにや見送りながら通り過ぎたうしろで、耳がけがれそうなことばを聞こえよがしに投げてよこして、ぼくは駆け出したい気持ちを抑えるのに精一杯だったのに、美貴子ときたら、その場はつんとすまし顔でやりすごしながら、彼等が遠くになってしまうと、

——太郎君、嬉しかったんじゃない。

なんて言って、ぼくを唖然とさせたのだ。美貴子との仲をあの連中が下卑(げび)た口調でからかったような関係だと、人から誤解されて嬉しがる自分が心の中のどこかにいるなどとは、全く思いもしないことだったから。思い出すのも恥ずかしいが、ぼくが生まれて一度も口から発したことのない女性の性器を表す卑語を、あのピンクやシマシマのトランクスたちが聞こえよがし

に投げてよこしたのを、美貴子は顔も赤らめずに聞いていられたのだろうか。
そんなことのあった直後だからなおさらのこと、急にぼくに向かっておんぶとかだっことか言い出してからかう美貴子従姉さんがぼくにはわからなくなった。

文彦従兄さんたちが起きないうちに、ぼくはこっそり別荘の裏木戸から外に出た。半ズボンの下の濡れたブリーフは気持ちが悪いが、海の匂いのするしめった朝の空気と夜のあいだに熱を失った砂の感触とは心地よい。どうせあの小川を渡る時に腰のあたりまで濡らしてしまうのだからそれまでの辛抱だ。それより、今夜からは海水パンツで寝てしまおうかと思ったりする。そうすれば、朝起き抜けに、たとえまた例の粗相をしてしまっても、そのまま海に飛び込み、誰も見ていない沖でパンツに浸み込んだぼくの精霊を波に洗い流してしまえるはずだから。ぼくの一滴の羞恥と屈辱とは、たちまち海に呑まれて雲散霧消するか、プランクトンと間違えられて、小魚たちの餌になって食べられてしまうかに違いない。誰もいない早朝の海原で、ぼくは波に浮かんで手足を伸ばし、しらばっくれた顔で大空に向き合い、そして遠い過去からか、人間ならぬ異物の世界からか、それともあの夢の黒雲の中からかやってきた自分に帰る。

空にはまだ夜が明けたばかりの、洗いたての色が残っていた。空気が湿っていて、裸の二の

腕あたりが露を帯びたように冷たく快い。サンダルを脱ぎ捨て、素足を波に洗わせる感触を楽しみながら、ぼくは渚伝いにうしろ岩を目ざす。今朝の海岸は、日中のにぎわいを忘れたように人影もない。こっちに来て最初にこの海岸を散歩した夏の始まりの早朝には、週末だったせいか、砂浜は徹夜組のテント張りが所狭しと占領して、恐らく眠らずに狂態を繰りひろげたに違いないうぞうむぞうたちの乱脈な夢のあとがいやでも目についたが、今朝はそのテントが一つもない。砂の上で足をからませて眠りこけていた男女の姿もない。誰が忘れたのか、ひしゃげたビーチパラソルが一つ、波に濡れて転がっていた。

半ズボンの裾を思いきり濡らしてぼくは例の小川を渡る。ちょっと美貴子従姉さんの顔を思い浮かべたが、かまわずじゃぶじゃぶとまたぐらに達する流れをももの力でかきわける。うしろ岩は、小川を渡って砂浜が小高い岬の岩礁地帯に突き当たった裏手にある小さな〝秘境〟だ。外界の荒い潮流に洗われた岩膚は、素足で踏むと涙が出そうになるほど鋭いぎざぎざを持った貝殻なども付着していて、日帰りやキャンプ組みのうぞうむぞうたちは滅多にやってこない。波打際の岩場に近づくと、眠っていた磯の虫たちが、まるで古代から蘇った生き物のような原始のよろいをまとって、ざわざわとざわめきながら地球の隙間に向かって一斉に逃げ込んでゆく。

遊泳禁止の立て札が引き抜かれて転がっている脇を通って、ぼくはうしろ岩のてっぺんを目

ざす。つまずいたり、踏みはずしたり、滑ったり、どっこいしょと言ったりしながら、一番頂きに達するまでは休まない。誰もついてくる者はないし、誰もそこに待っている者もいない。うしろ岩は海だけが海の顔をしてぼく一人の前に地球を拡げるだけだ。

やがてぼくは潮騒の海に向かって一番高い所に直立し、深く風を吸い込み、ぜいぜいしていた呼吸を整える。そしてぼくは思い出そうとするのだ。ぼくの中に不意にやってくるあの奇妙な感覚を。遠い過去から呼ぶような懐かしい感覚、人間ならぬ異物の世界から呼ぶような遠い感覚、そしてあの夢の中の雲から呼ぶような誘惑的な感覚を。

しかし、波と風にかき消されてしまうせいか、それは急にはぼくのところにやってきてはくれない。そしてぼくは待つのが面倒になってたちまちにして現実に戻る。海に対峙(たいじ)しながらぼくは小川で濡らした半ズボンを足元にずり落とした。次にブリーフを脱ぐ。脱ぎかけた片足の先に問題の布切れをちょっとからませてから、えい、やっ、と掛声をかける。ぼくの肉体から離脱したぼくの一部分は一瞬空中で羽根を拡げ、それから波しぶきに向かって舞いながら落下していった。急に無防備になった腰のあたりがすかすかして心もとなく思うと同時に、ぼくは思いがけなく熱く勃起しかけているものに気づいて狼狽した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com